

高木折右衛門物実録『武道白石英』とその成長

萩原大地

一、はじめに

『武道白石英』は高木折右衛門の武者修行を題材とした近世実録作品であるが、その存在や内容はあまり知られていない。本作については、すでに杉田美登の先行研究が備わる。杉田は本作の跋文を根拠として、間宮兵右衛門書留を基に片倉家本が生まれ、さらに片倉家本を写した長尾某が写した甲本、甲本から派生した丙本（月下亭写）と乙本（深川隠士南郊写）が存在すると述べ、『武道白石英』の写本系統を明らかにした¹⁾。杉田が調査した諸本に、今回稿者が調査した諸本を合わせると、次のようにまとめられる。書名の●は、杉田が先行研究で取り上げた写本を意味する。

【『武道白石英』諸本】

書名	所蔵先	巻冊数	備考	杉田分類
● 『武道白石英』	片倉家	十巻五冊	明治三年正月持主佐々木虎吉	片倉家本
● 『武道白石英』	龍谷大学図書館	巻数なし一冊	月下亭 水野勝英写之	丙本

書名	所蔵先	巻冊数	備考	
● 『武道白石英』	宮城県立図書館	十五卷三冊		乙本
● 『武道白石英』	国立国会図書館	三卷一冊存		乙本
● 『武道白石英』	早稲田大学図書館	十五卷十五冊		乙本
● 『武道白石英』	杉田氏蔵本	十七卷五冊		乙本
● 『武道白石英』	杉田氏蔵本	十五卷二冊		乙本
『武道白石英』 A	弘前市立弘前図書館 (D)	十五卷五冊	文久二年三月写藤原武正蔵書	乙本
『武道白石英』 B	弘前市立弘前図書館 (D)	卷一存	序に「講師瑞龍軒」とあり。 ⁽³⁾	系統不明
『武道白石英』	盛岡市中央公民館 (D)	十卷三冊		無記名
『高木武勇伝』	架蔵	十五卷十五冊	卷三・十・十三欠。	乙本
『高木白石英雄記』	架蔵	二卷一冊	天保七年写。	無記名
『武道白石英』 A	架蔵	二卷二冊		無記名
『武道白石英』 B	架蔵	三卷三冊		乙本
『武道白石英』	茨城県歴史博物館 (D)	前編・後編 (三十卷十冊)		新出
『武道白石英』	早稲田大学 (請求記号 13 03370 1-30)	前編・後編 (十五卷三十冊)		新出
『武道白石英雄記』	国会図書館 (請求記号 229-241)	上・中・下 (四十五卷七冊)		新出
『武道白石英』	酒田光丘図書館本 (D)	前編・後編・三編 (四十五卷五十冊)		新出

(D) は国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースによる閲覧を意味する。以下、本稿では明朝体の一群を「既出本」、ゴチック体の一群を「新出本」と呼称する。

右表の通り、『武道白石英』既出本は、月下亭や深川隠士南郊の名前がない写本も見られるものの、乙本が最も現存している。ただし、乙本・丙本・無記名本に内容の相違はほとんどなく、この三種は同一の内容と言って差し支えない。成立時期は書写年次から、幕末までに成立したものと思われる⁽⁴⁾。

一方、杉田の先行研究で言及されなかった新出本も存在する。新出本のうち、茨城県歴史博物館本・早稲田大学本は前後編、国会図書館本・酒田光丘図書館本は全三編から成立し、いずれも物語が大幅に増補され、巻冊数も大幅に増えている。つまり、一口に『武道白石英』と言っても、杉田が先行研究で扱った作品群（既出本）と、その一群の内容が成長した作品群（新出本）が存在するのである。そこで本稿では、既出本の内容を概観しつつ、その物語がどのような成長を遂げて、新出本へと発展したのかを明らかにする。

二、既出本『武道白石英』の概略

まず、既出本『武道白石英』の内容を確認する。『武道白石英』は前半が折右衛門の九州行き、後半が折右衛門の奥州帰還という物語構造を持つ。この構造にしたがって、各条の物語を要約すると、以下のようにまとめられる。なお、物語冒頭の数字は便宜的に割り振ったものである。なお、底本は架蔵『武道白石英』Bを用いた。

『武道白石英』前半

【一】慶安年中、白石城主片倉小十郎の家来稲富主膳嫡男には嫡男右衛門、その弟右門という子がいた。鷹狩りの折、右門は自ら名乗り出て巨大な石を動かしてみせる。この出来事を佐藤助太夫が主膳に語ると、主膳は右門を呼び出し、自分の力を無闇に誇ってはならないと教訓し、右門の名を高木折右衛門と改める。

【二】小十郎が松平陸奥守をもてなす酒宴の際、折右衛門は陸奥守の求めに応じて、鉄砲十丁を碁盤の上に乗せて軽々と持ち上げてみせる。それを見た柴田主水は、当家第一の強力として、六十歳に近い松前鉄之助を呼ぶ。折右衛門が高さ四尺、横六尺の手水鉢を七、八間ほど脇に運ぶと、鉄之助はそれを元に戻してみせる。折右衛門は鉄之助にあやかりたいと、大盃の酒を三度押し頂く。一方、折右衛門の母は、折右衛門が家督を病弱な兄から奪おうとしていると思ひ込む。折右衛門は兄の隠居願望と母の悪心を鎮めるため、一人武者修行に出る。

【三】折右衛門、佐竹領の剣術の名人武藤段右衛門の道場を訪れる。折右衛門は立合稽古を行い、折右衛門が敗れる。その後、庄屋方に宿泊した折右衛門と段右衛門は最上川の氾濫に悩む農民の話聞き、折右衛門は川縁の大石を並べて柵を作る。これは高木が水口石として語り継がれたという。やがて折右衛門は、藩主が自分を家臣として召し抱えようとしていると

『武道白石英』後半

【十二】折右衛門、筑前で狐憑きにあった女性を助ける。

【十三】虎松、堤が切れたので遠回りするように言われ、石を並べるのは大したことないと軽口を叩く。それを聞いた農民は腹を立てるが、虎松は事もなく石を並べ終える。その場を立ち去る際、折右衛門は道を塞ぐ大石をどかす。農民は天狗だと肝をつぶし、それ以来、この場所は天狗堤と呼ばれた。一方、折右衛門は虎松に自分が改名した経緯を語り、力伊達を諫めた。

【十四】折右衛門、彦山で山伏と再会する。山伏は虎松に「最初の主人は生涯の主人ではなく、後の主人が子孫に伝わる子孫である」と告げる。虎松は元服し、森田虎之丞と改名するが、高木の名字を所望する。折右衛門は「高木は風に倒るの金言」を守るように言い、高木の名字を授ける。

【十五】折右衛門、馬術が盛んな徳島に渡り、上田氏に馬術の稽古を受ける。折右衛門・虎之丞・上田氏は砲術を見物した後、酒宴を開く。その場の余興として、虎之丞・折右衛門は砲術の筒を軽々と持ち上げて見せ、周囲を驚かせる。

【十六】折右衛門・虎之丞、土佐国で女性の幽霊と出会う。幽霊は大雨で崩れた大岩の下敷きになって死んだと語り、死骸を掘り出して菩提を弔ってほしいと告げる。庄屋を訪ねて事実を確かめた二人が、大岩をどかしてみると幽霊の言う通り、白骨が

知り、佐竹領を出ることを段右衛門に告げる。段右衛門は折右衛門に劍術の奥義を託し、その奥義を将来、息子源治郎に伝えるように依頼し、折右衛門も承知する。常陸国の山中で夫婦に宿を借りた折右衛門が微睡んでいると、父主膳の霊が現れ、「油断なり」と警告する。折右衛門が目覚ますと、まさに夫婦が折右衛門を殺害しようとしていた。難を逃れた折右衛門は刀を盗まれたと気づき、宿の女を問い詰めると、彼らは盗賊の一味だったと判明。折右衛門は盗賊の隠れ家に踏み込み、盗賊二人を切り捨て、女は隠れ家への案内を理由に許し、その場を立ち去った。

【四】折右衛門、道中で快存・哲道と名乗る虚無僧に出会う。快存は十手、哲道は鎖鎌の使い手であり、双方が立合う。折右衛門は哲道が快存に劣ると悟り、両者の間に入って勝負を預かる。その後、哲道は別れ、快存は自らの俗名を工藤権八郎と明かし、再開を約して別れる。折右衛門は円丈と出会い、寺に逗留するが、そこへ浪人たちが強請に現れる。円丈の代わりに応対した折右衛門は、寺の鐘を掴んで浪人たちの前に置くと、皆逃げ去った。それ以後、円丈は大力の者だと噂が立ち、円丈も大力のふりをして暮らしたという。

【五】折右衛門、下野国那須明神で男女の心を見かけ、庄屋の協力を得て男女を夫婦にする。

出てきた。折右衛門は菩提を弔うように頼み、その場を立ち去る。

【十七】虎之丞、丸亀領の境で侍衆に自分の荷物を蹴散らされたことに怒り、喧嘩騒ぎを起こす。あわや刃傷というところで、侍衆の主人が折右衛門に詫び、折右衛門も主人に詫びる。折右衛門は虎之丞に對して、高木の名字の由来を忘れたかと語り、大いに諫めた。

【十八】折右衛門・虎之丞、日岡峠で重荷にあえぐ牛車を見かけ、牛を押してやる。やがて下り坂になると、牛は一目散に駆け出すが、そこへ座頭が通りかかる。牛遣いは座頭に声をかけるが、座頭はうろたえるばかりである。折右衛門・虎之丞はこれを見て牛車に手をかけて牛を留める。牛遣いは涙を流して感謝し、周囲の人は鬼神の所為だと評判した。

【十九】折右衛門・虎之丞、浅草一月寺を訪ねて鉄道のことを尋ねると、村岡十左衛門と還俗したと告げられる。十左衛門と再会した折右衛門は、道中で出会った老夫婦から伝えられた砲術の秘書や口伝を渡す。十左衛門は折右衛門と従弟分のつきあいを望み、折右衛門も承諾する。十二月、大火が起けると、折右衛門・虎之丞は鎮火のために獅子奮迅の働きを見せる。それを見た丹羽若狭守は折右衛門を召し出そうとするが辞退されたため、虎之丞を召し出す意向を示す。折右衛門は虎之丞が稽古半ばであるとして、さらなる修行の後、十左衛門を通じて返事をする」と述べて立ち去る。

【六】折右衛門、越中国立山で大山伏と出会う。山伏は谷底に大石を落とし、折右衛門にも大石を落とすように勧め。指示通りに大石を落とすと、山伏は「武辺誇る事あるべからず。然に当年の内には、其方心ならず人の頼みにより苦勞なる事あるべし。必ず辞退すべからず」「汝が旅宿のあたりに火災あり」と予言する。折右衛門が山を下りると、山伏の落とし石はその場に残り、折右衛門が落とし石はなくなっていた。山伏の正体は天狗であった。その夜、天狗の予告通り火事が起こる。

【七】虚無僧快存（工藤権八郎）は故郷に戻り、一子吉之助と暮らしていた。そこへ大酒博打好きの林三九郎が転がり込む。権八郎の諫めによつて三九郎は態度を改めたように見え、それを見た権八郎は喜び、落魄しても手放さなかつた金五十兩と名刀左文字を見せて武士の心がけを説く。これを見た三九郎は権八郎を酔わせた後に殺害し、金と刀を奪う。瀕死の権八郎は吉之助に三九郎が敵だと告げる。そこへ折右衛門が来訪、権之助は折右衛門に吉之助の後見を頼んで絶命する。折右衛門は吉之助と三九郎を探す途中、乞食に落ちぶれた松岡佐治郎を助ける。折右衛門と吉之助は柳生市之進と対面、そこへ佐治郎から三九郎は林瀧之丞と変名したとの知らせが入る。折右衛門は市之進から柳生流の奥義を伝授され、大坂へ上る。大坂で吉之進の系図が盗まれるが、折右衛門がスリを捕まえて取り戻す。一方、三九郎は碓屋十兵衛に左文字を売り、それを白井頼母が買い求める。この頼母と佐治郎は従兄弟の關係であり、刀の話聞いた佐治郎は折右衛門たちを呼び寄せる。頼母は仕官の斡旋を口実に瀧之丞を足止めし、吉之助の敵討ちを実現させる。吉之助

【二十一】折右衛門・虎之丞、武藤段右衛門を尋ねると、段右衛門は死去していたものの、源治郎と無事に再会する。そこへ安達甚八という浪人が現れ、武藤源治郎との仕合を望む。折右衛門は源治郎の末弟と名乗り、源治郎の代わりに甚八と仕合をして勝利する。年の暮れが迫る頃、小十郎が大病という噂が流れ、折右衛門は急ぎ国元へ戻ろうとするが、源治郎に段右衛門から伝えられた奥義を伝えていないことに気づく。源治郎は折右衛門の国元での伝授を希望し、折右衛門一行は国元へ急いで戻る。

【二十一】折右衛門一行、白石へ帰国。折右衛門は小十郎に道中の出来事を話すと、小十郎は大いに賞賛し、折右衛門を五百石の鉄砲頭に取り立てる。源治郎は折右衛門から段右衛門の秘事を伝えられ帰国、虎之丞は武藤流の印可を許され、丹羽若狭守に仕官した。折右衛門は妻子を迎え、子孫も繁栄したという。

【以下、問宮兵左衛門の間答が記され、折右衛門や周囲の人物の後日談が語られる。本稿では虎之丞のその後に関する記述を引用する。】

（前略）後に高木右馬之助といふ人、諸国武者修行し、強力の間こえ、所々国々に言ひ伝へし事、何人ならん。折右衛門と間違て言伝へしか如何」答て曰く「折右衛門、武者修行は継母の難を避け、兄左門が慈愛にて退れ隠れを留めんばかりにして、諸国へ名を売の修行にあらず。又至りて慎み深き人なれば、勇

は見事瀧之丞を仕留める。その後、折右衛門と吉之助は津山藩主に拜謁、折右衛門は藩主の求めに応じて、三枚の鉄板を軽々と扱つて見せる。吉之助は頼母の養子として迎えられ、白井主水と改名する。折右衛門・吉之助・佐治郎は、吉之助の父の墓前に瀧之丞の首を手向ける。

【八】折右衛門、津山を出立した後、手負いの猪を仕留める。それを見て折右衛門に宿を貸した老夫婦は、哲道の両親であった。老父は折右衛門に家伝の火術の秘事を哲道に伝えるように頼む。折右衛門は承諾する。

【九】折右衛門、休憩中の茶屋で傍若無人に振る舞う馬士を懲らしめ、それを見た中村隼人と懇意になる。

【十】折右衛門、庵で休んでいると女性の幽霊に遭遇。女性は僧侶に殺されたと告げると、今度は僧侶の幽霊が現れ、本尊の座台に隠したお金で弔つてほしいと告げる。折右衛門は庵主に金子を渡し、菩提を弔うように依頼する。

【十一】折右衛門、日向国延岡で石を抱えて百度参りをする虎松に出会う。虎松は「山伏からこれから出会う廻国者に頼めば願いが叶うと告げられた」と語り、折右衛門はその山伏が立山の天狗だと悟り、虎松を廻国修行に付き添わせると決意。折右衛門は神社の鐘を持ち上げ、虎松に元に戻すように告げた後、武士の心構えを教訓する。二人が自宅に帰ると、虎松の母は息子の足手まといにならないように自害していた。二人は菩提を弔つた後、出立する。

力を隠して人に知らせず。ただ力の強き修行者のみと覚へり。是を以て見れば、折右衛門にあらず。其右馬之助はおそらくは虎之丞ならんか。虎之丞、二本松にありしが、後年に至りて村岡十左衛門よりは高木虎之丞を寵愛ありて、しかも知行も村岡よりは勝りければ、十左衛門、是をねたんで讒言の事ありしより、虎之丞、折右衛門に隨身の時より武者修行を願ひけれども、虎之丞は又勇氣余りある生得を氣遣ひて召さざりしが、此時村岡が讒言を折よしと無理に暇を取りて二本松を出て、又白石に來りて折右衛門へ武者修行の事を願ひて、終に修行に出でけるが、馬虎に化するといへる母の夢物語もあれば、右馬之助と変名して諸国を廻りたるや。高木の姓を名乗し者、外にあるべからず。其後、上州前橋の城主松平大和守（十五万石なり）、五百石の知行にて召抱られしとぞ。（後略）

右の内容表を見ると、既出本では力自慢と人助けの二種類の武勇伝が展開される。力自慢の物語には、【一】【二】【三】【四】【六】【七】【八】【九】【十三】【十五】【十六】【十九】が該当する。いずれも常人では扱いきれない物や人を、折右衛門が持ち前の怪力で軽々と扱って見せ、それを周囲の人々が賞賛する内容であり、折右衛門の怪力を印象づける物語である。

人助けの物語には【五】【七】【十】【十二】が該当する。その内容は敵討ちの後見役、心中を試みた若者の婚姻援助、幽霊の救済、狐退治と多岐にわたるが、いずれも折右衛門の怪力が披露されることはない。これらの物語は「庄屋も逗留の内の有様を見るに、中々只の修行者にてはあらずと思ひければ」(【五】)、「殿の仰せには、折右衛門は幼稚の孤子を見捨ず、朋友の義を立ち、敵を討せし事、誠に其方が武辺の余慶なりと有り難き御意」(【七】)、「唯今迄多くの人の恐れたる当寺の怪事を奇特にも見顕し給ふ事、凡人ならぬ事と皆々感心致しける」(【十】)、「評に曰、かゝる狐狸の類まで、此兩人(稿者注：折右衛門と虎松)が武芸を恐れて退きたる事、誠に奇特なる人物なり」(【十二】)といった記述の通り、折右衛門個人がいかに奇特な人物であるかを描く物語とまとめられる。

このように、既出本では折右衛門の力自慢と人助けという二つの武勇伝が繰り返されており、前者の武勇伝は折右衛門の能力、後者の武勇伝は折右衛門の人格を描くものであった。この二つの物語が反復されることで、折右衛門は文武に優れた人格者として描き出されるのである。本作における武勇伝の反復は、単なる冗長化ではなく、折右衛門を理想の武人として描くための手法と理解すべきであろう。

一方で、武勇伝の反復に該当しない物語も存在する。具体的には【十二】【十三】【十四】【十七】【二十】【二十一】である。この五つの物語は虎松を折右衛門の後継者に位置づける物語と指摘できる。

【一】で、折右衛門の名の由来は「其方只今より姓名を改め遣すべし。高木折右衛門と改名し、高木の姓も当家に由緒あり。折右衛門といふ事は古き諺にも高木は風に倒るといふ事あり。万事人並みに慎み候へば、風に折れる氣遣ひなしといふ心を、朝夕忘れざるべし。」という父からの訓示だと語られるが、この訓示は折右衛門から虎松へと継承される。例えば、【十二】

の折右衛門から虎松への訓示は「凡そ武士たる者は力量ばかりにてもあらず。心の操を磨くを以て第一とする。力足らざるを羨むる事なかれ。常々は力もなき者と思ふべし。」というものであり、その訓示の内容は、折右衛門が父から受けた訓示とほぼ同一である。【十三】では、自らの力を誇示した虎松を、折右衛門は「其方いまだ若き故、血気にはやって斯様の事なり。我が若き時には名を高木折右衛門と改められしぞかし。これ以後、慎みて必ずく力伊達いたすべからず」と「道すがら虎松を叱り、「深く是をいましめ」る。【十四】では、虎松が元服に際して高木の名字を所望したため、折右衛門は「高木は風に倒る事の金言を其方も守らんとや」と述べ、虎松に高木の名字を授ける。そして【十七】で喧嘩沙汰を起こした虎松を、「其方、高木を忘れたりや。」「短慮は身を失ふの大敵なりと思ふべし。」と「大いに誡め」る。

この一連の物語では、折右衛門が自らの名前に込められた訓示をたびたび虎松に伝授している。この行為はいわば折右衛門の精神を伝承する行為であり、虎松を折右衛門の後継者として位置づけるものである。事実、虎松は【二十一】で「武藤流の印可をば許され、剣術・武法・馬術まで残らず伝へての上、先約なればとて二本松の城主丹羽若狭守様へ仕官の身とぞなりにける」と折右衛門の武術を継承したことが示唆されている。

以上の通り、既出本は折右衛門の武勇伝と、折右衛門の後継者虎松の誕生を描いた作品なのである。

三、新出本『武道白石英』の成長

前節の既出本の続編の様相を呈するのが、茨城県歴史博物館本・早稲田大学本・国会図書館本・酒田光丘本といった新出本である。本稿冒頭で述べた通り、茨城県歴史博物館本・早稲田大学本は前後編、国会図書館本・酒田光丘本は前編・後編・三編から成る。前編の内容は既出本と同一であり、後編の内容も新出本の間で共通する。したがって、新出本の内容は、既出本↓茨城県歴史博物館本・早稲田大学本↓国会図書館本・酒田光丘本と発展したものと考えられる。以下、後編・

三編の内容を国会図書館本『武道白石英英雄記』を基に示す。

『武道白石英』後編

【一】村岡重左衛門は自分が推挙した虎之助が出世するのを妬み、彼を讒言する。虎之助は吉原灯籠を見物に行き、そこで家来の定助を介抱したため門限を破り、小林勇馬に叱責される。微睡む虎之助の前に母の霊が現れ、諸国修行を勧めて消える。虎之助は折右衛門との再会を兼ねて諸国修行に出る。

【二】虎之助、熊谷堤で盗賊に襲われるが撃退し、盗賊の首に刀を巻き付けて去る。その後白石へ赴くが、折右衛門の妻から片倉小十郎に従って上京したと聞かされる。道中の辻堂で、哲道・快存の奉納した絵馬と武具を見つけ、そこで文武の士と仰がるべしと告げられる。

【三】上野国碓氷峠で大岩が落ちて一匹の馬が死ぬ。この馬は八兵衛が兄に無理を言って借りた馬であった。虎之助は馬の死骸を見せて事情を話すように勧め、岩を退かして死骸を籠に運ぶ。八兵衛は一足先に小諸に戻り、事情を話して虎之助を迎える。そこへ子牛ほどの狼が女子を啜えたと知らせが入り、虎之助が狼を仕留める。虎之助は傷を負うが、朝比奈粽という妙薬によって全快する。

『武道白石英』三編

【一】高木力士之助、実子の虎之助を武者修行に送り出す。虎之助は八歳にして盗賊を生け捕るほどの剛の者であった。母を心配させまいとして、力士之助と虎之助は密かに首途を祝うが、その心底を察した母が現れる。虎之助、出立。

【二】虎之助、鹿島神宮へ参拝し、下総国の庵で一泊する。庵主は下総国印旛郡の重山某に仕えた与十郎という人物であった。虎之助は庵主の懺悔を聞いた後、江戸へ向かう。下野国の佐野次郎左衛門、吉原で八ッ橋に馴染み、家業を傾ける。虎之助、道中で薬をもらい、そこで出くわした盗賊を撃退する。

【三】虎之助、盗賊が持っていた行李を持ち主に返す。持ち主は佐野次郎左衛門の番頭全右衛門であった。虎之助、次郎左衛門と対面して懇意となり、再び薬をもらって別れる。後日、次郎左衛門が八ッ橋を殺害して自害する。虎之助、行人のいる貧家に一泊する。その夜、虎之助は病人伝五郎に夜な夜な相撲を挑む小児を捕らえる。その正体は河童であった。虎五郎、駿府国に入るが、腹痛に悩まされ、医師長松軒の治療を受ける。

【四】虎之助、諏訪明神に参詣した後、上諏訪の温泉で一人の法師と出会う。この法師は熊谷峠の盗賊であった。虎之助は改心した様子を見て首の刀を外す。

【五】虎之助、穂坂の山寺で微睡んでしていると、棺桶を漁る狼が現れる。虎之助はたくさんの火を付けた線香を投げ込み、狼を撃退した。その後、甲州見延山へ参詣し、相模国田村で子供を襲った八尺の泥鼈すねはんを退治する。その夜、泥鼈が虎之助の前に現れて乗鞍を授ける。

【六】敦賀屋清七とお艶は仲睦まじく暮らしていたが、清七は病に冒される。尾牧安元は腎の病氣であり、お艶を遠ざけるように勧める。お艶は番頭の与兵衛と相談、与兵衛は安元に箱根での湯治を提案。清七と与兵衛、安元の弟子安老は底倉へ向かう。虎之助、箱根を訪れ、清七と面会する。その夜以降、お艶に似た女性が清七の前に現れ、清七は弱り始める。虎之助は女性を射殺すが、その正体は山鬼であった。

【七】虎之助、伊豆三島で荒梵論字に出会う。荒梵論字、近衛入道の力自慢や折右衛門の評判を語り、虎之助と別れる。虎之助、兵庫沖で大鰐を射殺する。

【八】虎之助、浅野内匠頭の家臣山鹿道遙軒の弟子となる。道遙軒の七十歳の宴席で、虎之助は相撲を取ることとなり、常日頃力自慢をしていた奥野定四郎を軽くあしらう。大石内蔵助はこの話を聞き、虎之助を諫める。道遙軒は内蔵助と虎之助に秘伝

【四】長松軒の娘が妖怪に攫われる。虎之助は申陽洞と呼ばれる領域に入り、妖怪の住む洞穴に落ちる。虎之助は妖怪を討伐し、長松軒の娘と三人の婦女を救出する。その折神人に二双の珠と助言を授かり、四人の娘を連れて長松軒のもとへ帰る。その後、伊勢国鈴鹿峠で馬方と侍の喧嘩を収める。実は馬方と侍は盗賊であり、二人で虎之助を襲うが、虎之助は返り討ちにすする。

【五】虎之助、京都で越年の後、大坂へ赴く。講釈師馴龍斎と懇意になるが、伍子胥と范蠡の優劣を論じ、馴龍斎を言い負かす。これが遺恨となり、備前橋で馴龍斎とその手下と喧嘩となる。虎之助、馴龍斎らを打ち負かして去る。

【六】虎之助、伊予国に渡り、入水を試みた女を救う。女は、夫の四郎右衛門が客の金子と書状を奪われたため、娘が遊郭に売られる寸前だと語る。虎之助は自分の金子を与え、親子の危難を救う。数年後、虎之助は九州へ渡ろうとするも、船が難破して漂流する。虎之助は南京に漂着、そこで現地人を苦しめる虎を狩った後、南京陣南道に赴き、吏使の蘭陵と懇意になる。その後、帝に神人の二又の珠を献上する。虎之助は帰朝途中、帆柱から落ちた伝馬船を怪力で受け止める。虎之助は肥前国平戸から伊予国へ戻り、四郎右衛門一家と再会した後故郷へ戻る。

【七】虎之助、君主の御前で諸国修行の体験を語った後、蘭陵の公事を語る。

を伝授し、虎之助は奥州白石を目指す。

【九】虎之助、大坂川口姫路屋で盗賊の海道佐左衛門一味を生け捕る。この出来事が評判となり、近衛入道が虎之助を召し出す。虎之助は近衛入道の求めに応じて鹿の角を裂いたり、知恩院の鐘を動かしてみせる。国元では虎之助退去の理由が判明し、村岡重左衛門と小林勇馬は知行を没収され、虎之助の帰参が決まる。

【十】虎之助、鞆子で手負いの猪を切る。近衛入道拝領の刀の由来が語られる。

【十一】虎之助、帰参。村岡と小林の追放を知り、両者の帰参を願ひ出る。虎之助の訴えにより、村岡と小林は帰参が許される。虎之助は丹羽若狭守の指南役となる。虎之助の物語は『白石英雄記』としてまとめられた。その後、虎之助は力士之助と名乗り、嫡子が虎之助を名乗った。その子孫は代々繁栄したという。

後編は、主人公が折右衛門から「虎之助」（既出本の「虎之丞」）へと移り、彼の武勇伝が展開される。おそらく既出本の間答にある「虎之丞、折右衛門に随身の時より武者修行を願ひたれども、虎之丞は又勇氣余りある生得を氣遣ひて召さざりしが、此時村岡が讒言を折よしと無理に暇を取りて二本松を出て、又白石に來りて折右衛門へ武者修行の事を願ひて、終に修行に出でけるが、馬虎に化するに言ひよる母の夢物語もあれば、右馬之助と変名して諸国を廻りたるや」という記述から、「虎之助」を主人公とした続編を描く着想を得たのであろう。その内容は一貫して虎之助の力自慢の武勇伝を描くものであるが、既出本で折右衛門に叱責されたせつかちで短慮な気質は全く見られない。むしろかつて悪事を働いた盗賊

①ある港で女性が殺される事件が起こり、沙榮という男が捕ま
るが自白しない。現場に落ちていた包丁を見せると、鐘瓶とい
う人物の所持品と判明し、鐘瓶が真犯人と判明する。②田了の
娘が殺された事件では、恋人の李艷が疑われるも、娘の幽霊に
扮した官人に対する態度から満哲という人物が真犯人と判明す
る。③堤の洞穴に盗賊が住んでいることを見破り、一網打尽に
する。④洛陽で如彭が殺害された事件では、鑿が凶器になつた
ことから大工が疑われるが、喧嘩相手の張那が犯人と見破る。
⑤一人の僧侶が豪農の家に泊まると、夜中に男女が入ってくる。
盗人と思った僧は家を抜け出すが、井戸に落ちて捕縛され、そ
の井戸からは女の死体が出る。犯人は僧と思われたが、定斧と
いう者が真犯人であつた。

【八】力士之助、中老職に任ぜられ、虎之助は寺社奉行に任ぜら
れる。虎之助、第一の家老江口三郎左衛門の末女と結婚。子孫
は代々栄えたという。

を許したり（四）、自らを陥れた村岡や小林を許したり（十一）と、度量の広さを示す物語が見られる。すなわち、後編は「虎之助」を主人公に据えてその武勇伝を増補することで、彼を折右衛門同様、武勇と人格に秀でた人物として描き出した物語と言えよう。

続く三編は、力士之助（後編の「虎之助」）の息子虎之助を主人公とし、その活躍を描く物語である。【一】【二】【五】のように、主人公を腕力に秀でた人物として描く物語もあるが、物語のほとんどを妖怪退治や中国の公事裁判⁵が占める。折右衛門の系統に連なる主人公が異界や国外で活躍する物語を描くことによって、彼を折右衛門や「虎之助」以上の人物として描き出そうとしたのであろう。ただ、主人公が妖怪が住む世界に迷い込んだり、中国に漂流したりする物語は作中に新奇性こそもたらしているが、既出本や後編に見られた武勇伝として十分に機能しているとは言いがたい。三編は主人公の活躍を異界や海外に求め、物語のさらなる成長を試みたものの、その試みは失敗に終わったと評せよう。

四、小括

本稿では、『武道白石英』の諸本について、その内容と成長を確認した。具体的には、杉田の先行研究で扱われた既出本は、折右衛門の力自慢と人助けという二種類の武勇伝が反復されるとともに、「虎之丞」を折右衛門の後継者として位置づける物語であった。新出本の後編は、既出本で登場した「虎之助（＝虎之丞）」を主人公とし、その武勇伝を具体的に描くことで物語を成長させ、「虎之助」を折右衛門同様の人物として描き出した。続く新出本三編は、「虎之助」の子を主人公として、彼の異界や海外での活躍を描くことで物語の成長を試みたが、稿者はその試みを失敗に終わったと評価した。本稿によって、『武道白石英』の具体的な内容とその成長を概観できたものと考ええる。

【注】

- (1) 杉田美登「読本『武道白石英』」(日本文学論集編集委員会『日本文学論集』一卷(大東文化大学大学院日本文学専攻院学生会、一九七七年二月)収録)
- (2) 今回検討する写本以外にも『武道白石英』の諸本は数多く残る。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」によれば、白石図書館に『武道白石英』の刊本が三種現存するようだが、現時点では未見。
- (3) 幕末に活躍した講釈師赤松瑞龍か。
- (4) 立命館大学アート・リサーチセンター「日本芸能・演劇総合上演年表データベース」によれば、嘉永元年八月十六日に歌舞伎「高木織右武実録」(江戸中村座)が上演されたとある。『武道白石英』の書写年次を見る限り、本作を歌舞伎に取り入れたものと思われる。
- (5) 中国の公事裁判の内容は、①が『棠陰比事』「崇龜認刀」、⑤が『棠陰比事』「向相訪賊」と類似しており、中国文学を素材としたものと思われる。

※本研究はJSPS研究活動スタート支援 JP21K19997 の助成を受けたものである。